

蘇芳集

新米 青山 丈

凌霄の前つまづいたことがある
鶏頭を見るより先に触れてゐる
宵闇の中をゆるりと追ひ抜かれ
十六夜の寝る頃となる手足かな
柘榴が落ちて見えるまで転がるよ
村のはづれで十月のバスに乗る
新米のライスを皿に平らにす

挿し替へて 別府 優

手水屋に高きを活けて梅雨明くる
黒き皿くろきに洗ふ盆用意
生命の音たてて八月十五日
籠に縄引き込んでゐる炎暑かな
蟬時雨出前のとどく露店かな
溶き卵とぢて台風圏に入る
挿し替へて造花の白き厄日かな

背凭れ 前田 陶代子

電車過ぐ音を背ラにして晩夏
雨あとの雲の華やぎ早桃買ふ
深みゆく夏や薄暮の草の丈
築山に夕日のなごり暑気払ひ
半夏過ぎけり錠剤のほの甘き
しやほんの香残る手のひら夜の秋
背凭れに凭れて夏の夜を更かす

炎 昼

松原 ふみ子

原爆忌

宮尾 直美

夜の秋の一舟遠し周防灘
昭和へ戻る夏足袋の小鉤かけ
炎昼や並木の影のひとつづつ
誰もかも親し暑さを言ひ合へば
これからの私の時間サンデラス
草叢の騒立つは夏逝かすべく
けさ秋の空へ真直に縦走路

秋 日傘

峰岸 よし子

夏の果て

八木下 末黒

あをあをと空の降りくる魂祭
半月のかかる送り火焚きにけり
盆過ぎの風に水の香葉ずれの香
桃食べて言葉やさしくなりにけり
人の名をつぶやくやうにぶだう食む
朝顔につめたき朝日さしにけり
秋日傘たたみ思ひの外に出る

地震あとの夜のしづけさを青葉木菟
夕涼や豆腐一丁買ひに出る
うしろより八月の来るふとさびし
にぎり飯ふたつ夜発ちの秋遍路
逢はぬ人もう逢へぬ人鰯雲
豆飯の焚けて八月十五日
濡れ縁に雑巾ひとつ原爆忌

翡翠を追ひて疾走のバイク
冷房の中や団扇を手放さず
白シャツに出て八月十五日
蓮地の葉のうらがへる敗戦日
あつまつて四羽の鴉晩夏かな
見事なる鴉の抜け羽夏の果て
浜茶屋に裸足うれしく搔き氷

雁ヶ腹摺山

吉田幸敏

古鍬を洗ひ立てたる今朝の秋
なにもかもまだ熱を持つ秋はじめ
ひとの世をはみ出してゐる秋簾
夜顔やすきなことだけして過ごす
雲居して雁ヶ腹摺山や秋
農道に小屋掛けて売る盆のもの
ひんがしのしらみて果つる踊かな

掃いても掃いても

小川美知子

街道の作業着専門店晩夏
瞳のなかに風吹いて来る夏の果
星合の電車は川を渡りけり
真夜中の雨音を聞く処暑のころ
掃いても掃いても八月の凌霄花
誰か来て隣に座る草の花
警官が四五人秋のさるすべり

水面ひとすぢ

木内憲子

青東風の水面ひとすぢ魚走る
秋はすぐ来て山墓に風の道
八月に置く母の忌をさびしめる
年々のしづかな夜なり送り盆
かまつかや椅子は誰かを待つやうに
皓然と月茫茫と過去のこと
鶏頭が赫くてどこかまとまらぬ

ひつじ草

清水裕子

朝よりをメールに追はる花木権
水馬跳べば池の面騒がしき
ひつじ草見てゐて紫外線の的
竹皮を脱ぐ音あらば聞きもして
雨脚にズボンくちやくちや濃あぢさゐ
とある寺の尼の独り居濃あぢさゐ
花火咲く聞ふるはせてふるはせて

喜雨の粒

下平直子

朝摘みの青菜のこぼす喜雨の粒
知らぬ子が路地駆け抜ける夏休み
浅草にひと日遊びし髪洗ふ
庭下駄の朝の湿りや花芙蓉
初秋の森はつあきの風の音
秋の蚊を払ひつ座禅組み直す
朝に言ひ夜また秋の暑さいふ

西新井大師

富田正吉

みんみんがもう十分なこゑをだす
西新井大師の土用太郎かな
涼しさは卒寿を越えし人のこゑ(青山丈大兄)
どうしても扇を使ふ日なりけり
追悼の俳誌涼しく読みにけり
片蔭の角を曲がれば片かげり
また墓を訪はな白ばなさるすべり

自句自解

竹皮を脱ぐ音あらば聞きもして

清水裕子

此の所竹林を目にする機会が少なくなつた。農地が宅地造成へと変化するに至つた影響と思われる。残念であり、寂しくもある。竹に纏わる季語に「竹植う」がある。陰曆の五月十三日に植えると根付きがよいとの言い伝えである。成長期には一日三十糎ほど伸びるそれにつれ皮を落とす。落ちる瞬間と皮を脱ぐ過程に長らく心を入れているが、自然界の神秘的な事柄は敢えて追求しない方が、ロマンがあり宜しいのではと思いを新たにしたい。

齒触りでみる辣蕪の漬け具合

別府優

いつの頃よりかカートを引いての買物が日常となつている。六月になると旬を迎えた辣蕪が店頭に並び始める。短い期間に産地が変わるので何度も足を運ぶのだが毎年その頃になると気忙しく心が騒ぐ。長年続けている辣蕪の手仕事も手際よくなつた。次つぎと漬け込んだ硝子容器が増えるのを見て、昔は部屋中二階まで噎せ返る様な匂いに包まれた。今では匂いはほとんど無いが何か懐しさを感じる。今朝より粒よりの辣蕪を食卓に並べた。